

富山大学教育学部教授

林 三雄先生 にご退官記念事業

記念講演要旨

## 必生の教育

林 三雄

はじめに

まず、こんなにたくさんの方々、私の退職を記念して、お集まり下さいまして、このような晴れがましい席で、お話できる機会をお与えくださいましたことに対し、心からお礼を申し上げます。

実は、この催しを、中川先生からお聞きしたときは、こんな盛大な会だとは思わなかったのです。これまでに研究室でよくお会いしていた方々が集まってくださって、ごく内輪な会を開いてくださるのだと思っていたのです。ところが、車がステーションホテルの前に来ましたとき、玄関に非常にきれいな字で「林三雄教授退官記念パーティ会場」と大書されているのを見て、びっくりしました。

更に、玄関へ入って、教育学部の心理学や幼稚園課程の先生方、心理学や教育学や幼稚園課程の卒業生の方々が、多数いらっしゃるのを拝見して、これは、もう少し覚悟して来るべきだったと思いました。

又、これから申し上げるお話も、もう少し吟味して来るべきだったと思い、いつものルーズさを後悔しました。

さきほど中川先生が、私をご紹介してくださいました際に、私が時間構わずに夜の八時過ぎまでも研究室で話し込むことが多くて、私の家内が困ったであろうと、家内をいたわるような言葉でおっしゃいました。それをお聞きして、本当に中川先生にご迷惑をかけていたと反省するのです。私は、時間ばかりでなく、何事にもルーズなたちで、講義のときも、ノートなど作らず、控えのメモぐらいで講義して来ましたが、今日もそのようなルーズさで参りまして、申し訳なく思っています。

中川先生からは身にあまるご紹介をいただきまして、重ね重ねのご好意にありがたく恐縮しています。私ばかりでなく、家内までお招き下さいまして、本当にありがたうございます。だが家内の前で講演めいたことをするのは、生まれて初めての、とんでもないことで、家内から「ああ、大学でもあんなやり方で行っていたのだなあ。」と、この二十八年間を評価されることになりました。

## 「題を『必生の教育』とした理由

今日のお話の題を「必生の教育」としましたが、皆さんは変わった題だと思われることでしょう。たしか「必生」という熟語は普通の辞書にはないはずですが、たとえあるとしても、私が考える意味とは違つてでしょう。実は、今日のために何を話そうかと考えていたとき、教養部の二神弘先生からお便りをいただきました。それには、私が大学で公開の最終講義で述べた「必死の努力から必生の努力への転換」の言葉を、「二神先生」ご自身の今後の行動基準にするつもりでいる、と書いてありました。それほどまで私の考えに賛同していただけたことがうれしくて、それでは皆さんにも、同一のテーマを教育の立場から述べてみたいと思ったのです。

前にも新聞記者から、「大学を去るに当って、何か一言だけいってすれば、それはどんな言葉でしょうか。」と問われたときも、「日本人は必死という言葉が好きなのだが、いまこそ必生の大切さを悟らなければならない。教育は生命の永遠的必生のためである。」と申したことがあります。十九歳で教師になって、六十五歳で大学を去るまでの私の四十六年間の遍歴を、一言に圧縮すれば、やはり「必死」から「必生」への人生観の転換であり、また「必死の教育」から「必生の教育」への教育観の転換であった。というのが最も適切な表現だと思います。

私は、昭和五年に富山師範学校へ入学しましたが、教職が好きだったからではありません。こんなことを言つと申し訳ないのですが、私は小学校時代の受け持ちの先生などを通して、教師といつと偽善者のおいがかしてならず、私もまた偽善者になるのかと思つと、たまたまなかつたのです。それで、教育学窓会の会誌(第四十七号)にも書いたように、当時の家庭事情からみて、私が師範学校へ入るのが最も無難かつたのに、とつとつ入学を一年遅らしてしまつたほどです。又、入つてからも、教育学の先生から、やたらと教師には教育愛が大切だと聞かされるのは、参りました。今日の言葉でいつと、デモシ的に教師になろうとしていた私ですから、教育愛の話聞くのがいやで、とつとつ「教育愛はあるにこしたことはないでしょうが、愛は感情ですから理屈通りにはいきません。それよりも、どつすれば愛が起ころうようになるか、と考えることが大切ではありませんか。」といつ意味の質問をしました。すると、その先生は大きな声で、「お前の考えは社会主義だ。」と叱られました。

さきほど中川先生が、私の「心理治療の本質についての考察」といふ論文の中に、「愛が心理治療の本質である。」と書いてあると申されました。確かに今は、心理治療者の無条件の愛が心理治療の本質だと思つています。しかし初めは、高い次元で考えていたわけではありません。ただ私は、中学生のときから、生まれなければよかつたと思つような厭世的なところがあつて、心や体に悩みのある人がいると、無関心でおれないたちでした。だが、これは同病相哀れむ的な低次元なもので、その証拠に、師範学校に入ったとき教育愛の言葉につまずいたので、今は本当の教育愛は普通の児童や青年に対してもわき出るよつな、健全で明るい愛だと思つています。おそらく天性の教育者は、初めか

らそんな愛を豊かに感ずるのでしょ。

私のよつな至らぬ者も、今は心理相談で同病相哀れむ式の次元以上の愛を感じ、又、教育においても本来の教育愛を、ある程度は抱くようになったつもりですが、それはやはり必生の立場に到達してからのことです。

必生の立場へ至るまでの過程については、これからお話するのですが、その前に、私がこれまで教育愛について学生にどのように説いて来たかを、少し述べます。

私は、教育愛を内に感じないのに教育界に入ったので、教育学部の学生たちのなかのデモシカ組が気にかかるのです。私のように、こんな学生に教育愛を説くのは禁物です。それで教育愛を説く代わりに、私の経験を例にして、まず教育は一生をかけるに値する仕事であることを一応知的に明らかにする。次に今日の制度では子供は教師を選ぶことが不可能に近いのだから、教師になった以上は、子供たちに対して教師としての責任を果たすべきだと説く。そして以上の二つを心がければ、教育愛は自然に少くも強まってくるものだ、と話すのです。

実は、教育は一生をかけるに値する仕事だとの自覚も、一生をかけて次第に深まるもので、そのことは更にあとで述べることにして、ここで子供が教師を選ばないことについて、考えておきたいと思えます。

大学では、いくらか教師を選択する自由があるが、今の小中学校では、ほとんど選択の自由はありません。私が附属小学校長をしていたとき、あそこは良い教師が集まっているといわれるのですが、それでも学年初めに学級担任を発表すると、講堂にどよめきが起こるのです。担任者の名を読み上げること、子供たちが、喜んだり、しまったという顔をしたりするのです。教師の責任は重いですね。ところで責任に意識は、意志の自由と関係するので、感情のように随伴的なものと違い、初任者にも要求できるのです。

ところで、教育は一生をかけるに値する仕事だといつことは、一応は誰でも浅く知ることができるが、本当に知るには一生を要することです。私に教育がわかりかけたのが、四十歳を過ぎたころでした。そのころ、モレノの心理劇やヤスパーズのス精神病理学などの一連の心理治療関係の研究を通して、それまでモヤモヤしていた人間や教育の本来の姿が、少しずつ見え出したのです。それでも、十四年前に書いた「心理治療の本質についての考察」といつ論文は、今からみると不徹底です。もっと思索と実践を繰り返す必要があったのです。

## 二 主体的共同学習の研究

心理治療の研究と並行して二十年余り前から、富山市の小中学校で学級を借りて、研究室の学生諸君と、学習指導の実験的研究を続

けました。そうしているうちに、私にも積極性が出てきて、教育界に対して、子供の主体性と協同性を重んぜよ、と働きかけられるようになってきました。

そして、この学習指導の実験的研究を全校あげて試みる学校を求めていたとき、研究室の学生前田翠子さん(旧姓林)のお父様林精三先生が校長をなさっていた、氷見市立西条中学校の協力を得たのです。こうして、十五年前に主体的共同学習と呼ぶ学習指導法の教育実践が始まりました。その翌年には魚津市立本江小学校が研究に参加して、そこが十二年前に研究発表会を行ったとき、先の名称を協同的主体学習に改めました。この教育の実践的研究で、初めて私は教育に燃えることを体験しました。

ここで昭和三十九年に私が西条中学校の研究紀要に載せた小論の一節を読むことで、当時の私の教育の考えを理解していただくことにします。

高校入試と生徒の非行化に全国の中学校は悩みぬきながら、いわば「対症療法」に明け暮れて、かえって症状を悪化させている感じがする。受験準備に力を入れれば入れる程、非行化がひどくなる。それについて、政治の貧困と社会や家庭の責任を追究してみても、急に解決できる問題でもない。

大切なのは、対症療法でなく根本療法を考えること、他を責める前に教師みずから教育の正道に立っているかを、考えてみることにあると思う。

一人でも多く希望の高校に入れてやりたい心には、善意があり、高校入試での合格率を高めたいのは人情であろうが、そのための方法に誤りがあれば、非行は増加する。非行ほど目につかないが、臨床心理学的に非行にもまして問題なのは、神経症化の増加である。神経症化は生徒を内面的に苦しめ、不安、焦燥、無気力、無感動にし、ながく禍根を残し、自殺にも追いやる。

教育方法の第一の誤りは、授業において教師中心になり過ぎて、生徒を主体として尊重しないことである。教師は能動的に話し、黒板を独占し、生徒はただ聴き、写すだけとなる。教師は生徒の主体的学習の権利を侵害する。教師は独善的で、生徒のために苦労していると思っているが、事実は生徒の立場から生徒の心情を理解しようとはしていない。生徒は受動的になり、自発性や創造性や表現の自由は窒息させられる。教師の思考速度について行けない生徒は、雑念が起り、退屈し、無感動になる。ジツとしておれない生徒は、私語し、いたずらし、反抗したくなる。それでは教室の秩序が乱れるから、教師は統制管理のために、机を左右に離し、級友の背面を見るように配列する。これが中学校の教室である。生徒は教師の顔以外は正面から見れない仕組みである。学級に四十名の生徒がいるとすれば、教師から四十本の一方通信路が開かれているが、生徒たちの間には公式の通信路は皆無である。この離間策が頂点に達するのはテストの時である。教師は監視の眼を鋭くし、生徒はその眼を盗もつとし、不信と不正で道徳性は地に落ちる。これが教師中心の統制の帰着点である。

教育方法の第二の誤りは、生徒の競争意識を刺激して学習成果をあげよつとし過ぎることである。競争の強化は、必然的に生徒間の対

立、敵意、嫉妬、優越感と劣等感を誘発する。又、学校や教師に対する不信と反感を誘発する。それでも現代人は「競争によって社会は進歩し、学習成果もあがる」と考えがちである。アメリカは宇宙開発でソ連に遅れたので、従来よりも競争を教育界に取り入れて、遅れを取り戻そうとしている。「教育の過程」の著者ブルーナーも、この動きを肯定しているようだ。ただ競争の弊害を救うのにカウンセリングなどが必要だと考えてはいる。しかしカウンセリングでは、たまたま見つけた破れ目を繕う程度しかできない。共産系の集団主義教育も集団競争を利用する。危険なことである。点数のための学習は真実の学習でなく、一時的効果だけで、結局学習嫌いをつくる。

とにかく高校入試の圧力の下に、教師中心的に競争と統制を強化すれば、非行化と無感動化と神経症化は至極当然な帰結である。これは情けないが、現在の中学校の教育といわれるものの性格である。

もっと極言すれば、年々中学校の建築は美しくなるが、実は美しい牢獄になりつつあるのではないか。その中には義務教育なるが故に、三年間の禁固刑に服しているような生徒がたくさんいる。また今世紀の初めにエレン・ケイ女史が警告した「学校における魂殺し」が、今もなお学校で日々行われているのではないか。

教師のなかには、その意味で被告席に着かねばならぬようなことをしていながら、それを自覚しないで、反対に原告となって、生徒に論告し、親や社会を糾弾している者があるのではないだろうか。

なんとかして、こんな中学校の教育を早く改善しなければならぬ。

改善すべきことが二つある。一つは、教師中心式授業を改めて、生徒一人一人が学習の主体であることを確認することである。

もう一つは、生徒たちを競争させないで、協同させることである。

教師中心式授業を改めて、生徒一人一人を学習の主体と認めたからといって、教師が主体性を失うようなことはないのだ。それは映画の名監督が、スクリーンに一度も登場しなくても、某監督の名画といわれて、その主体性が輝いているようなものである。教室で学習の主役は生徒一人一人やグループであっても、教師あつての生徒であり、グループである。指導の責任を負っている主体は教師である。正しい学習指導は、教師と生徒が、共にかけ替えのきかない尊厳な主体として、協同参加して切磋琢磨することである。教師と生徒たちとの関係は、ヤスパースのいう「愛しながらの闘い」であり、「闘いながらの愛」である。この闘いは、たとえば人生や社会の問題に直面して、自己の見方以上の真実に迫るために、関係者が互いに意見を闘わせるときの、あの闘いである。真理を、善を、美を求めて、切磋琢磨する意味での闘いである。それはお互いに敬愛するから闘いもするのである。闘いの中に愛がある。

教師や生徒の一人一人は、彼らを取り巻く人々と織りなす巨大な網の結び目に在って自ら輝きつつ全世界を映す宝玉とも言つべき主体である。この多次元的な網の目として、教師も各生徒も、無限ともいえる時間空間の中で、文化に影響されて文化を生み、歴史に育てられて歴史を創りながら生きて行く。生徒と教師の相互作用の中で、生徒のみならず教師も本来に自己になる。

二つのような世界観、人生観、歴史観に立って、教育はどつしても主体的共同学習でなければならぬと、私は思うのである。

ずいぶん読み続けました。こんなに読んだのは、この十三年前の小論が、そのまま今日の教育荒廃の問題を正面からとらえていると思うからです。そしてそれを救うには、正しい世界観、人生観、歴史観に立つて教育や学習指導法を考えなければならぬことを、教育界に訴えていたのを皆さんに知ってほしいからです。

そのなかで述べた巨大な網のたとえは、仏教の華嚴経「因縁くさくさ」の中の話です。この網はインドラ網といって、帝釈天（たいしやくてん）の宮殿に懸けられ、無数の網の目ごとに寶石があつて、それが重々無尽にはえもいわれぬほどに美しく輝き合つたのです。この美しいインドラ網のイメージが私の世界観や人生観や教育観を導き、主体性と協同性を尊重する学習指導法を生み出してくれたのです。ちなみに思うのですが、日本には古くから仏教思想や中国思想が伝わり、それが日本古来の思想や風土と調和して、私たちの生活感情となつて体質化しているのです。この全東洋的な文化は、欧米文化にも勝る高さや深さを持っているのに、日本の教育界は、明治以来ほとんど欧米の教育の輸入模倣に明け暮れしている情けなさです。本当の世界的な高い教育を求めるのであれば、東洋文化と欧米文化を統合して、全世界的な視野で教育を考えなければなりません。その役割を果たすのに最も好条件の国が日本なのです。私はそう考えて、教育研究を、いわゆる和魂洋才的に試みようとしてきたのです。

ところで、西条中学校での教育研究は、かなりの成果をおさめました。まず警察署を煩わす非行が皆無になりました。校下に県下有数の海水浴場もあつて、それまで非行がかなりあつたのです。又、文部省学力テストの成績が急速に上昇しました。このテストでの西条中学校の成績は、それまで県内の中学校の中心よりやや低かつたのですが、一年余りで、県内のトップクラスになりました。この学力テストは、教育的にも政治的にも論議を呼んだテストでしたが全国的規模で行われるので、比較研究をする上では、信頼度の高いテストでした。

### 三 同病相哀れむ心から発した教育

私がこの教育研究を始めたころは、西条中学校や本江小学校へそれぞれ毎年二十回以上も出かけていたので、両校は私の実験室といつてよいほどでした。それほど一生懸命だったのですが、これは必死的な懸命といつべきか、それとも必生的な懸命といつべきか、と自問しますと、必死の方に近いといつべきでしょう。その理由は、当時の私は、まだ人生を苦の世界と感じ、「生まれなければよかった」といつ気分が、私の根っこにあつたからです。だからこそ、点数だ受験だと追いかけてられている子供たちを見るにしのびなくて、同病相哀れむ心で教育に当たつていたので。決して、おおらかな生々発展の人生観から出た教育ではなかつたのです。

もうこのころは、現場の先生に対しては、学生に対するときと違って、教育愛の必要を説けるようになっていましたが、それも生々発展の生命愛から発した教育愛ではなくて、やはり同病相哀れむ心から出た教育愛でした。

当時の私の、どちらかといえば必死で、厳しさのこもった教育愛の思想が、西条中学校の第二回研究発表会のために私が書いた小論にも明らかです。

そこでは「主体的共同学習の理念と実践と題して、冒頭にゲーテの『ファウスト』の一部を引用しながら、私の教育観を次のように述べています。

のん気に安楽椅子の上に寝そべるようになったら

おれはもうおしまいだ

うかうかと甘い言葉に乗せられて

おれがぬくぬくといいい気になって納まりかえるなら

そして、おれが欺されて快樂の夢によいしれてしまつたら

もうおれの最後の日だといつていい

賭けをしよう

これは、真理と人生の探求にひたむきのあまり、悪魔メフィストフェレスに魂を売って、賭けをしたときのファウストの有名な詩句である。私が、三年前、教師中心の一斉授業の居心地よさを指摘して、主体的共同学習を始めた心には、ファウスト的精神に通ずるものがあった。

海水が無理に侵入しようと、そつとどこかに穴をあけても

人々は一致協同して、すぐさまそれをふさぎに駆けつける

そつだ、おれはこの貴重な一致協同の精神に、すべてを捧げる

人間英知の最後の言葉はこつだ

「自由と生命をかちえんとするものは、日々新しく、これを攻め取らなければならぬ」

だから、ここでは、子供も、大人も、年寄も

それぞれ危険とたたかつて、すこやかな月日を送るのだ

おれは、そのような人間の集団をながめながら



自由な民と自由な土地に住みた

おれは、かかる瞬間にむかつて

「まあ、待て、お前は実に美しい」と呼びたい

おれのこの世に残した痕跡は、もはや永劫(えいこう)を経て滅びはせぬ

そつした高い幸福を予感して

おれはいま最高の瞬間を味わうのだ

ファウストは、このモノログのため、先にメフィストフェレスと行なった賭けに破れて死ぬこととなる。

しかし、このように命を賭けて、ファウストが目指したのは、協力一致の共同社会であった。みんなの生活をよくするために、みんなが働き、自由な社会をつくることであった。だからこそ、ゲーテは、死んだファウストの上に、天使を舞わせ、

愛だけが

愛する人をみちびくのです

と合唱させる。また天使たちにファウストの不死の靈魂を運ばせながら、

たえず努力して、いそしむものは

わたしたちが救うことができるのです

と、歌わせるのである。

私たちが、主体的共同学習を始めた理由の一つは、この社会にみなぎる人間相互の不信と憎悪、それをますます悪化させる競争的教育を排したからである。そして私たちの社会をファウストが人間探求の果てに到達した協力一致の共同社会に近づけたからである。そのためには、そのような社会を作る子供たちを学校で育てることが必要だったからである。

まさにゲーテの愛のみが、愛する人をみちびくのです」の言葉は正しい。そして、私は、さらに「愛のみが、愛の持ち主を育てる」と言いたい。

また、長い引用になりましたが、十二年前に以上のように書いています。この研究発表会には、長崎県や秋田県からも参観に来ました。

そして次第に北海道、秋田、福井、愛知、三重、大阪、兵庫、佐賀、長崎の諸地方に研究協力校ができて、それらを回るようになりました。このうちでも長崎県は特に熱心で、一年に四回も五回も出かけ、合計で三十日以上にもなって、「これでは私も十二分の一以上は長崎県人ですね。」と、長崎での講演の際に申したことがあります。このように各地を回って、各地の教育の実態を知ることによって、日本の教育を根本的に改めなければならないと、一層考えるようになりました。そうしているうちに、附属幼稚園長と、附属小学校長を兼ねることになったのです。

#### 四 附属幼稚園 小学校の改革

私の考えでは、国立大学の附属学校は、国民の税金で建っている学校らしく、日本の幼児教育や小中学校教育のあるべき姿を探求する場所のはずです。ところが、その園長や校長になってみて失望しました。結局、学歴社会のためのエリート教育の場ではないのです。これは教員養成学部の附属園 校として失格であると思います、その改革を試みようと思いました。

そして、在任中に、宇奈月のホテルニューオータニで全国附属学校連盟の北信越大会が開かれたときなど、私は地元の附属学校長ゆえに会長としてあいさつする機会をとらえて、附属学校よ、おまえはどこへ行く！と、問題提起をいたしました。附属学校は、その設置の目的に忠実に、日本の教育のあるべき姿を探求し、日本の教育の推進役を果たそうとしているのか。それとも、学歴社会のためのエリート教育の場として、それを望む一部の親や子供が、国民の税金で建てた学校を私物化するのか、と問うたのです。

この問いは、集まった親や教師にとってショックだったようです。なにしろ全国附属学校連盟とは、附属学校の子供と親と教師の利益拡大のための外郭団体のようなものですから。その後、全国附属学校長会の席で、校長会長であり連盟会長でもある東京学芸大学の湯本信夫先生が、宇奈月でのお話は、正論であり、心を打たれました。」と語られました。

とにかく、教育のあるべき姿を探求し、未来の教師たちに教育の正しいあり方を実習で指導すべき附属学校が、本来の使命に反して、日本の教育荒廃の推進役を演じていることは、どうしても許されません。又、このままでは、文部省が直属の附属学校に教育荒廃の推進役をやらせていることになりました。このことは文部大臣に訴えなければならないと思います。

附属幼稚園や小中学校が、日本の教育の正しいあり方を研究する使命に徹するのであれば、まず子供の入れ方を完全抽選制に改めなければならぬ。私はそう考えて、園長と小学校長に就任した年、入園入学の方法の改革を提案しました。それに対し、附属中学校側が強く反対し、附属小学校の中にも反対者が多くて、その年は自重しました。そして翌年、改正案として、まず幼稚園を完全抽選制にして、そ

の子供たちが小学校や中学校に移るときに、順次、完全抽選制に改めることを提案しました。しかし結局、幼稚園だけが完全抽選制となり、小学校は従来どおり一部抽選、中学校に初めてちよっぴり抽選制が加味されただけで、今日に及んでいます。残念ながら、附属小学校の私物化が温存されているのです。

次に園長となって、日本の幼児教育のいい加減さに気づいたことを述べます。

まず日本の幼児教育は、文部省と厚生省の二頭立てであり、それに市町村の財政上の思惑と民間人の営利主義がからんで、幼児たちは公私立の保育所と幼稚園に四分されていることです。さらに、幼児教育者の待遇が低く、それが幼児教育者の資質の低さ、ひいては幼児教育の質的不振の原因になっていることです。

具体的な例で申しますと、公立保育所へは国の財政援助が大きいので、人口二百二十万以上の横浜市に公立幼稚園が一つもないこと、県内では人口十七万人の高岡市にも公立幼稚園が一つもないこと、又、国は公立幼稚園教諭の給与を教育職として算定して市町村へ交付しているのに、大半の市町村は一般職として支給していること、その理由として、幼稚園教諭は小中学校教諭並みの苦勞をしていないとか、質が低いとか、一般職の保母より勤務が楽だとか、私立幼稚園の経営者側がけん制するとか、があげられます。

こうして幼児期の教育が人間育成上きわめて大切だと叫ばれながら、その教育の実態はお寒いままになっています。

## 五 高岡での教育研究の目的

幼児教育をこのままに放っておくことはできないと考えたのが、今度私が高岡市で仕事を始めた一つの理由です。

ところで、高岡市で幼児教育を始めたことについて、なぜ富山市でやらなかったのか、と度々問われるのです。実は、幼児教育だけをやるのであれば、種々の理由で富山市の方がよいと思うのです。だが、私には幼児教育に引き続いて、できれば私立小学校をつくって教育研究を行いたいという願いがあるのです。その理由は、今の小中学校教育には幼児教育以上に大きい問題があると思うからです。そして、この私立小学校づくりは、富山市では今のところ不可能というよい事情があるのです。

次に、私が私立小学校をつくって研究したいという理由を申します。まず、公立小中学校には、教育上も研究上も、かなりの制約があるので、県に二つや二つの意欲的な私立小中学校があった方が、教育の刺激になると思うのです。

もうそろそろ日本では義務教育もしくは公教育を緩和した方がよいのではありませんか。義務教育は、いわゆる発展途上国に最も必要な教育だと思います。ところが、今や日本は乱塾時代といわれ、所によっては子供たちの六十%も塾に行っているそうですから、かりに義

義務教育をやめても、教育を怠るような親はほとんどないでしょう。むしろ親たちには、今の義務教育への不信から塾へやっている者が多いのです。今の小中学校教育では、先にも述べましたように、親も子供も、学校や教師を選ぶことは困難です。大抵は、いやでも居住地の小中学校に入れられ、あてがいぶちの先生に教えてもらわなければなりません。これは大層不都合なことです。その点で、私はアメリカで既に行われているパウチャー システムに魅力を感じます。これは居住地の学校へ入れたくないとき、親は市町村当局へ申し出て、一名分の公教育費を受け取り、それを自分たちの選んだ学校の教育費に当てるやり方です。このやり方だと、日本で私立学校へ入れたときのようない税金と教育費の二重負担がなくなり、ずっと負担が軽くてすみます。

義務教育もしくは公教育を、日本もこの程度は手直ししてもよいではありませんか。こうして、親や子が、学校や教師を選ぶことができれば、閑古鳥の鳴く学校も現れて、教師があぐらをかけなくなります。パウチャー システムが日本にもできれば、ちょっとした市には私立小中学校が経営できて、それが公立学校と切磋琢磨することで、どちらの教育も向上すると思うのです。そして国や県は、過疎地の公立小中学校を手厚く保障すれば、どちらもよくなるのです。

ところが、現在の日本では、私立小中学校は、よほど大都会でないで経営できないといわれます。私の知る限りでは、例外が長崎と仙台にあるカトリックの学校と、沼津市の加藤学園だけです。カトリック信者は、すべてを捧げる対象があり、また背後に世界的規模の教会があるでしょう。加藤学園は、京浜地帯の医師や会社重役などの子弟が、十万円を超える教育費をかけ、家を離れて来ているらしいので、特殊な例になります。

富山市で私立小中学校が経営できないと思う理由は、大都会でないのと、国立大学の附属小中学校があるからです。附属学校はその敷地も建物も人件費も国民の税金でまかなわれているのです。場所、建物など、附属小中学校に匹敵するものを、私立として準備するためには、おそらく約三十億円はかかるだろうと思います。更に指導スタッフを吟味して、その人件費を加え、減価償却などと考えると、子供一人につき月々約五万円かかると思います。それがタタナのです。しかも、附属学校には、エリート教育百年間のイメージがあります。千円や二千円のPTA会費など物の数ではありません。既にそんな学校があるので、私が富山市に私立小中学校を建てて、思い切った実践的研究をしようとしても、ほとんど不可能だと思えます。富山市ばかりでなく、完全抽選制で入学させない国立大学附属学校のある都市では、私立小中学校が成り立たないと信じます。私は、今や国立大学附属学校は、一・二の例外を除いて、日本の小中学校教育の発展にとって、有益な存在というより有害な存在になった、と評価しています。

こんなわけで、私は富山市でと考えないで、高岡市ならあるいはと期待して、幼児教育から始めたのです。日本海沿岸で附属学校のある市を除くと、高岡市は最大の人口をもっているのですが、それでも建設費や人件費などを考えると、極めて困難なことだと思えます。

実は、幼児教育を行うのに、高岡市で幼稚園をつくるうとして、はやくも県の総務課の抵抗にぶつかりました。建設予定地から二キロメートル以内既に幼稚園がある場合は、認可のための審議を行わないことに決めて、認可の申請さえ受理しないのです。それで国や県や市

から全然補助を受けないで始めることになりました。その代り幼稚園や保育所の枠にとらわれなくて、自由に幼児教育のあるべき姿を追求することにしました。名称も、いわゆる「幼稚園」でなく「子どもの」としました。幼稚園という名称は、約百年前に、お茶の水大学の前身の東京女子高等師範学校で、フリーベルの Kindergarten を誤訳したのでしょう。私は、幼児も書ける「子どもの」がよいと考えたのです。

## 六 永遠の生命への愛と教育愛

大学を退いて、六十五歳で幼児教育の実践的研究をすることに對して、北日本新聞の記者が「なにも好きこのんで、そんなことをしなくてもと世間で言う人がいる」といいました。それに対して、私は「人間の生命の歴史は三十二億年にもなる。先に生まれた者が、生命のよりよい永続を願って、後に生まれた者のために努力するのは、当然のことでしょう」という意味のことを申しましたことがあります。実は、先日新聞に、東京で開かれた国際生物学会の記事が出ていて、その中に生物が地球上に初めて発生した時は、三十二億年前でなくて二十九億年前だとかいてありました。それで私の記者に言ったことの一部を訂正しなければなりません。

三十二億年前が二十九億年前に改められたとしても、実に気の遠くなるような昔です。そんな昔に発生した生命が、ずっと今日まで死なないで生き続けているのだと私には思えるのです。そう思うのは、私の体となって生きている父と母の細胞、その父や母となって生きた父方の祖父母の細胞や母方の祖父母の細胞と、次第にさかのぼって行くと、最後に二十九億年前の原初の生命に到達するように思うからです。

あるいは二十九億年以前にいったん切れているのかもしれませんが、その証拠もないようだから、二十九億年前にさかのぼれることに自分で勝手に思っているのです。もしこの考えが正しければ、私がこの目で見、この耳で聴くようになってからは、まだ六十五年しかたないが、私の生命そのものは、既に二十九億六十五年も生き続けているのだ、と言えるはずで、それで先日、「先生は何歳になられますか」と尋ねられたとき、「二十九億六十五歳になります」と答えました。次に、「先生、どうぞ長生きしてください」と言われて、「はい、せめて八十億歳まで生きたいものです」と笑って申しました。先方は、ちょっとげんな顔をされながら、私が今六十五歳で、八十歳まで生きたいと言つところを、冗談化したのだと受け取られたようです。私としては、たしかに冗談めかしていますが、本気でもあったのです。八十億歳まで生きたいと願うのは、地球その他の条件がよくて、生命が更に今後五十億年も進化し続けるように、そして私もそれに貢献できるように願つてのことなのです。

実は、うかつにも、やっと数年前に、生命の永続的發展を願う生命こそ、教育愛の実体だ、と私にはわかったのです。私の生命は三十二億年もしくは二十九億年も前に生まれ、私をつくった細胞は、変化しながらもなお数十億年も生き続けられる、という事実の上に立って、よりよい生命の存在を今後に願うことが、教育なのだ。とわかったのです。私に本当に教育愛といってもよい感情がわいたのは、それからです。それで退職と同時に、教育で得たものは教育へ返すことにして、高岡市に教育研究所をつくり、まず幼児教育を始めたのです。もちろん、それで足りないで借金するのですが、それでもよいという心になったのです。

天性の教育者ならば、理屈なしに教育愛が起るのでしょうか、私のように厭世的だった者は、人生無情生者必滅の意味での必死から教師という責任を背負ってみて、あらためて子供と自分の生きる意味をつかみたいと、ある程度必死に探し求め私の生命は既に二十九億年生きて、更に今後数十億年は生きる、いや必ず生きられるように努めなければならぬと、必生をめざすようになって、はじめて教育愛といえそうなものが生じて来たのです。師範学校の生徒だったとき、教育愛につまりてから、約四十年たつての到達でした。

必死から必生への私の人生観の転換、必死の教育から必生の教育への私の教育観の転換は、このように生じたのです。

ここで、先にお渡ししたカール・ジプランの詩を読んで、私のお話を終わりたいと思います。この詩は、私が今お話したと同じことを詩人的センスで表現しているように思っています。私が必生へ転換して間もなく、偶然この詩の前半のところを英文で読んで感銘を受け、この詩人のことを知りたいと思っていたとき、又この詩の前半のところをお茶の水大学教授だった周郷博先生のすぐれた和訳を読んで、再び感銘を受けたのです。そして二年前に、神谷美恵子さんの「この旅」(日本評論社)の中に、今お渡ししたように詩の後半も揃ったものを見つけたのです。以前、周郷先生は、この詩を四五世紀のペルシャの詩だと言われたそうですが実はカール・ジプランはレバノン人で、四十年ほど前に亡くなった人です。メアリー・ジプランというアメリカ生まれらしい夫人が、彼の詩など出版しているので、その原典が欲しいのですが、まだ手に入りません。周郷先生がお持ちかと思つて、電話で尋ねましたところ、「持たない、神谷さんがお持ちかもしれないが、今この病気が悪いらしいのでね」ということでした。神谷さんは、日本の最もすぐれた女性の一人であり、すぐれた精神医学者ですが、はやく「回復なさるよう」に祈ります。それでは詩を読みます。

赤ん坊を抱いたひとりの女が言った

どうぞ子どもたちの話をして下さい

（それで予言者は言った）

あなたがたの子どもたちは

あなたがたのものではない

彼らは生命そのものの

あこがれの息子や娘である

彼らはあなたがたを通して生まれてくるけれども

あなたがたから生じたものではない…

あなたがたは彼らに愛情を与えうるが

あなたがたの考えを与えることはできない

なぜなら彼らは自分自身の考えを持っているから

あなたがたは彼らのからだを宿すことはできるが

彼らの魂を宿すことはできない

なぜなら彼らの魂は明日の家に住んでいるから

あなたがたは彼らのようにならうと努めうるが

彼らを自分のようにならせようとしてはならない

なぜなら生命はうしろへ遠くとはなく、いつまでも昨日のところに

うろつろぐ、くすぐくすぐしてはいないのだ

あなたがたは弓のようなもの

その弓からあなたがたの子どもたちは

生きた矢のように射られて前へ放たれる

射る者は永遠の道の上の的をみさだめて

力いっぱいあなたがたの身をしならせ

その矢が速く遠くへ行くように力をつくす

射る者の手によつて

身をしならせられることをよるこびなさい

射る者とはび行く矢を愛するのと同じように

じっとしている弓をも愛しているのだから

この詩で、カール・ジブランが、赤ん坊を「生命そのものあこがれの息子や娘」だといひ、又、生命そのものを射手に、子どもを矢に、生命の行く手を永遠の道の上の的にたとえたのは、見事だと思ひます。ジブランとはどんな人か、詳しく知りたくて調べているのですがま

だよくわかりません。ただ、この詩に関する限り、キリスト教やマホメット教やインド思想を超えて、東西思想の融合の上に立つ思想の持ち主のように思われます。ジブランが、予言者の言葉として、子供を生命そのものの息子や娘だといったのは、私のように科学的に考えていたのか、それとも詩的表現と見るべきなのか、それも判断できません。しかし、とにかく、この詩は、すばらしい必生の詩だと感心します。

## 終わりに

ずいぶん長いお話になりました。皆さんが熱心に聴いて下さるので、ついいい気になっておしゃべりしました。今お話したように、ある意味では、私は永遠と生きてほしいほど生きられるので、おおらかに生きていたいと思います。しかし、この目で見て、この耳で聴くことのできる年数はあとわずかです。その意味では、私は残りの人生を、厳しく生きたいと思います。おおらかさと、厳しさは、矛盾するようで矛盾しないのです。私の前半生は、厭世の懐疑のために、怠惰に流れるかと思うと、ゆとりのない厳しさに陥るといつ不安定なものでした。今は、おおらかに、そして、厳しく生きられそうに思います。

六十五歳を超したので残り少ないのですが、幸い、私にはまだ上に兄が二人、姉が三人います。一番上の兄が八十五歳で、それから三つおきに私のところまで欠けないでいるのです。その平均年齢は、ほぼ七十五歳になります。それで私もこれから十年生きる確率が高いのです。もう十年、この身と心で生きられるならば、ほんやり生きるべきでないと思ったことも、今度の高岡での仕事の動機の一つです。これからも皆さんのご支援によって、生き長らえて、私立の小学校の設立でも見ることができれば、それ以上の喜びはありません。なにとぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

このように、ゆっくりお話する機会をお与えくださって、ご静聴たまわったことを深く感謝して、このお話を終わります。ありがとうございました。